Kansai University Repository
このページは自動生成のため、本来の表記と異なる場合があります。

大学生のイラショナルキャリアビリーフと就職活動との関連 [論文要旨及び審査の要旨]

著者	森本 康太郎
発行年	2022-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第873号
URL	http://hdl.handle.net/10112/00026820

［21］

氏　　名	森本（もりもと）　康太郎（こうたろう）
博士の専攻分野の名称	博士（心理学）
学　位　記　番　号	心博第 43 号
学 位 授 与 の 日 付	2022 年 3 月 31 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学　位　論　文　題　目	大学生のイラショナルキャリアビリーフと就職活動との関連
論　文　審　査　委　員	主 査　教　授　脇田　貴文
	副 査　准教授　細越　寛樹
	副 査　教　授　浦上　昌則（南山大学）

論 文 内 容 の 要 旨

就職は，心理的・経済的自立に向けた重要な発達課題の一つであり，就職活動は大学卒業後のキャリアを形成していくためには避けて通れないものである。大学生は就職活動を通じて様々な経験をするが，そのなかには，自分を成長させるものもあれば，心身に大きな負担となるものも含まれる。このため，わが国における大学生の就職活動は，精神的な過酷さを伴うものであり（輕部・佐藤・杉江，2015），心身共に大きな負担を強いられる活動（藤里・小玉, 2011）であることが指摘されてきた。就職活動をする学生に対して、円滑に就職活動を進めていけるよう，有効な支援を行うことが必要である。そして支援を行う上で，個人の就職活動の進行の妨げとなる要因や，あるいは促進する要因，およびそれらが就職活動に対して及ぼす影響について明らかにすることが不可欠であると考えられる。

その要因として本研究では，キャリア発達やキャリア上の目標達成に関する問題について，それらを妨げる原因となるイラショナルビリーフの存在に注目する。具体的には就職活動の停滞や本人の進路希望に沿わない状況を引き起こす原因として，キャリアについてのイラショナルビリーフがあり、これに焦点をあてた支援を行うことで、キャリアにおける諸問題の解決や改善が期待できると考える。そこで本研究では、イラショナルキャリアビリーフの測定と関連変数との関係について検討し，就職活動や職業決定などキャリアに関する問題の軽減・解決を目指して，イラショナルビリーフを修正してラショナルビリーフに置き換えるという支援の可能性を議論した。

本論文は 6 章から構成され，その中に 7 つの研究が含まれている。先行研究をレビューした上で，イラショナルビリーフの既存尺度の検討（研究 1)、新たな尺度の開発（研究 2～5)、そしてその応用可能性を検討した（研究 6，7)。

第 1 章では，先行研究のレビューを行い、大学生の円滑な就職活動や職業決定を妨げる原因として，キャリアに関するイラショナルビリーフがあげられること，認知的変数であるイラショナルビリーフに介入することで問題の解決を目指せること，問題解決を目指す上でビリーフを取り上げることの意義と利点について述べている。そして，わが国特有の新卒一括採用のスケジュールに代表される特有の採用・就職の慣行・制度を踏まえた上で、実際に就職活動を経験している日本の大学生が，どのようなビリーフを持っているかについての検討の重要性を示唆している。そして、キャリアについてのイラショナルビリーフを測定できる有用な指標を整備する必要性を挙げ、Krumboltz（1991; 1994a）によって開発された Career Beliefs Inventory（CBI）の課題を指摘し、キャリアについてのイラショナルビリーフが就職活動や職業決定に与える影響について検討するために，測定尺度を慎重に検討することが重要であることを指摘している。

第 2 章では、本研究の目的と課題を簡潔に整理している。第 1 に、主に海外で行われてきた今までのキャリアビリーフ研究で，何が明らかにされてきたのかを概観し，ビリーフを取り上げることの意義やポテンシャル，課題点を確認すること，第 2 に、我が国の大学生が就職活動や職業決定に対して抱くイラショナルキャリアビリーフの尺度を作成すること，第 3 にイラショナルキャリアビリーフがどのような性質を持つかについて検討すること，第 4 に大学生の就職活動や職業決定におけるイラショナルキャリアビリーフの役割について検討することを通じて，本研究の主たる課題である，日本の大学生が持つキャリアに関するイラショナルビリーフが，就職活動や職業決定においてどのような働きや機能を持つのかについて，その心理的過程（メカニズム）の検討を行うことが述べられている。

第 3 章では，各国で展開されてきた，キャリアビリーフを扱った実証研究ならびに介入研究を概観し，先行研究からまだ明らかにされていない点，検討が不足している点を確認し，残されている課題が何であるかを示している。続いて，ビリーフを測定する尺度である CBI の心理測定的課題を確認している。その上で， CBI 日本語版を作成し、データを収集した上で尺度の問題点を明らかにしている（研究 1)。

第 4 章では，日本の大学生イラショナルキャリアビリーフを測定する尺度の作成を行っている。はじめに，キャリアに関するイラショナルビリーフおよび類似概念の既存尺度の項目収集と概念的分類を行い（研究 2)，あわせて，就職活動を経験した学生を対象としたインタビュー調査の質的データ分析（研究 3）を経て、学生用イラショナルキャリアビリーフ尺度の項目を作成している。そして、データ収集を行い、その信頼性と妥当性を検討し（研究 4)、イラショナルキャリアビリーフの基礎的性質を検討している（研究 5)。

第 5 章では，学生のイラショナルキャリアビリーフが就職活動に及ぼす影響を検討している。第一に，イラショナルキャリアビリーフが就職活動ストレスに与える影響を検討し（研究 6)，続いてイラショナルキャリアビリーフ下位尺度得点のプロフィールによる就職活動の様相の相違について検討している（研究 7)。

第 6 章では，本研究で得られた結果と考察を整理し，その意義と限界を考察したうえで今後の課題を踏まえた展望を行っている。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本博士論文の特徴として，①わが国において検討が遅れている就職活動におけるイラショナルビリーフの存在に着目し、丁寧な先行研究レビューを行っていること、②概念の有用性および応用可能性を示した上で改めて概念の整理し、既存の測定尺度の検討を行っていること，③既存の測定尺度の課題を踏まえ、質的研究・量的研究を経て測定尺度の開発を行っていること、④開発した尺度に関して、詳細な妥当性の検討を行うとともに適用可能性まで示唆されていること，が挙げられる。

以下，心理学研究科が定める「博士学位論文審査基準（課程博士）」に従って，審査委員の見解を記述する。

１．問題意識が明確で，課題設定が適切であること

大学生の就職活動におけるイラショナルキャリアビリーフに着目し、先行研究レビューを踏まえて概念の重要性を指摘している。そして個々の大学生に対して、イラショナルキャリアビリーフを踏まえた支援を行うという見通しを持った上で研究を行っている。具体的には、既存尺度の検討、新たなイラショナルキャリアビリーフ尺度の開発、そしてその適用可能性の検討を行っている。このように，問題意識は明確であり，課題設定も適切と評価できる。公開口頭試問においては，イラショナルキャリアビリーフという概念をどのように測定しうるのか、開発された尺度において適切に測定できるのかという点において活発な議論が展開された。その上で今後の研究の方向性について様々な意見が出された。

２．国内外の先行研究を適切に検討，吟味していること

第 3 章を中心に国内外の先行研究を丁寧にレビューし，イラショナルキャリアビリーフの重要性を論理的に指摘している。この点に関して、公開口頭試問においては特に指摘はなされず、十分な先行研究の検討、吟味がなされていると考えられる。

３．研究目的に照らして研究・分析の方法が適切であること

研究目的達成のために，既存尺度の検討、新たな尺度開発のために質的研究、量的研究を行うという丁寧な尺度開発プロセスがなされている点が評価できる。尺度開発の方法論、分析に関して適切であると考えられる。一方、公開口頭試問では研究 7 に関して、イラショナルキャリアビリーフ尺度の各得点をもとにクラスタ分析を行い、そのクラスタごとに同尺度の各得点を説明変数とした重回帰分析を行っている点について，分析上の問題が指摘された。また、データの取得の時期と対象となる学生の学年に関してどのように考えるべきかという議論がなされた。この点に関しては、質疑応答の中で改善の方向性、更なる検討の必要性が共有された。

４．論文構成が的確で，論理的展開に整合性，一貫性，説得性があること

論文構成は，第 2 章においてまとめられているとおり、明確であり、整合性、一貫性、説得性がある。また、尺度開発研究の流れとしてオーソドックスで妥当であり、その１つ１つは非常に丁寧になされていると評価できる。公開口頭試問においても，この点に関する指摘

はなされなかった。

５．全体を通して社会的・学術的な独創性が認められること

イラショナルキャリアビリーフという概念に関して、既存尺度の問題点を指摘し、新たな尺度を開発していること、そしてわが国の就職活動を行う大学生の支援を行う際に参考となる情報を提供できる可能性まで示唆されていることから、社会的・学術的な独創性が高いと評価できる。

６．国内外の学会や社会に対して貢献が認められること

本論文の内容の多くの部分が，すでに学術雑誌に掲載されている論文を元に構成されていることから学会に対する貢献が認められる。社会に対しての貢献に関しても、就職活動の支援という観点からその重要性とともに適用可能性が示唆されていると評価できる。

以上の通り，本論文は丁寧な尺度開発研究を経て、より実践的な尺度の活用まで検討が行われており，博士論文審査基準からみて適切と判断できる。よって，本論文を博士論文として価値あるものと認める。